

参加者：

哲学的問い：対立が反省から起こるなら、反省はどこから生じるのか。不幸（対立）が予定されている幸福（統一）は幸福なのか。内面的統一は完全ではないのではないのか。西田における反省（reflection）とはどのようなものか。

### 2-9-3 「衝突→反省」

实在の統一作用がその内容（統一せらるべきもの）より区別せられるのは、实在における種々の統一の矛盾衝突より起こるからである。实在における種々の体系（統一）が相衝突し相矛盾したとき、この統一が明らかに意識の上に現れてくるのである。衝突矛盾のあるところに精神あり、精神のあるところには矛盾衝突がある。

つまり、純粹経験において矛盾衝突と主客の分別が起こっていない場合、我々は自分の意識（自己）を意識されなく、無意識の状態にある。しかし、衝突が著しくなるにしたがって、主、客が別れ、自分の意識を意識されてき、自己の心なるものを自覚することができる。そして、その自分の意識で現実と自分の間に大きな差を意識せられる、すなわち反省が行うのである。

#### 「反省→大なる統一」

この体系の矛盾衝突は实在そのものの性質より起こるのである。实在は一方において無限の衝突であるとともに、一方においてまた無限の統一である。衝突によって、我々はさらに大なる統一に進むのである。实在の統一作用なる我々の精神が自分を意識するのは、この衝突の際においてである。

つまり、人間は意識的構造であるので、意識と反省から逃げられない不幸な存在であるとともに、人間が持っている反省は大なる統一に進むことに欠くべからざる契機である。实在がそれによって、自ら展開するのである。意識の統一はそのように、一層大きくなっていくが、いつも不完全さ（対立の不幸）を持っている。世の中で、人間は自分の力でどれほど頑張っても、自分を立てようとしても、結局、絶望になってしまう。しかしながら、人間は絶望で、「自力」→「他力」という転換が起こってくる。そこから、宗教の境界が開かれる。神は統一と対立との両面を持っているのか。そうならば、神は不完全さを持っているのか。これら質問を持ちながら、皆さんと一緒に第四章－神を読みましょう。

### 本分要約

4-3-5 精神と自然は同一なる直接経験の事実そのものが見方によって差別を生じるものである。实在の根柢である神とは、この直接経験の事実即ち我々の意識現象の根柢である。すべて我々の意識現象と自然現象は形式を離れないものである。統一的あるものの自己発展が全ての実在の形式であって、神とはそのような实在の統一者である。宇宙と神の関係は、我々の意識現象とその統一との関係である。神は宇宙の統一者であり宇宙は神の表現である。それは否めない事実である。神は我々の意識の最大最終の統一者であり、我々の意識は神の意識の一部であって、その統一は神の統一より来るのである。